継ないでよかったSPC

承継インタビュー Vol.5　2021.07
(株)ヴォーグ美容企画

継ないでよかったSPC

SPC GLOBAL 第 31 代承継プロジェクト実行委員会

STAFF

Publisher / SPC GLOBAL

Editorial department
/ SPC GLOBAL 第31代承継プロジェクト
継ないでよかったSPC 別冊編集チーム
加藤 武彦(東海統括本部)
長島 正男 (中央統括本部)
比嘉 薫(中央統括本部)

Edition in chief / 山崎 博文 (㈱d2 Factory)

Production and design / ㈱d2 Factory

Title design / 大野 勝彦

Illustration / 照喜名 重樹 (㈱CREATIVE SHEEP)

© 編集・制作

SPC GLOBAL
〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-1-33
TEL 03-6418-0511　Fax 03-6418-0514
H.P. http://www.spc global.jp

㈱d2 Factory
〒135-0048
東京都江東区門前仲町1-13-12-701
TEL 03-5615-8325　Fax 5615-8326
H.P. http://www.darc.co.jp

※本誌掲載の記事、写真・イラストの無断転載を禁じます。

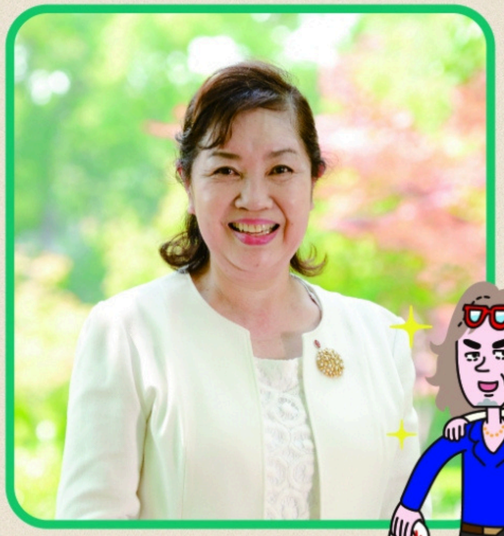
21・7・16

SPC GLOBAL

継ないでよかったSPC

今回ご紹介する企業：
(株)ヴォーグ美容企画

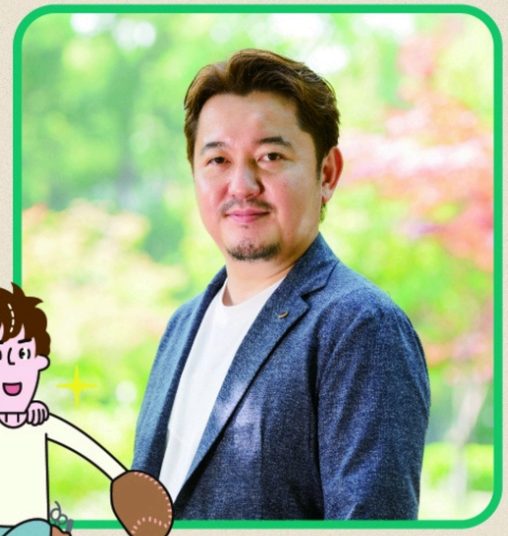
Pitcher



橋爪 尊子（はしづめ たかこ）

- 1946 年 12 月 11 日生まれ（現在 74 歳）
- SPC 入会：2001 年
- 所属：関西統括大阪本部
- 出身地：高知
- 主な修行先：大阪の美容室（6 店舗のチェーン店）
- 家族構成：夫（逝去）・長女・長男
- 創業又は承継時の店舗数：10 店舗

Catcher



橋爪 雅之（はしづめ まさゆき）

- 1978 年 9 月 17 日生まれ（現在 42 歳）
- SPC 入会：2011 年
- 美容技術経験：なし
- 経歴：大学を経て社労士の資格を取得後、自社に就職
- ピッチャーとの関係：親子（長男）
- 現在のポジション：代表取締役社長

経営理念

「常に一流を目指す」
「顧客第一」
「豊かで幸せ」

事業所概要

社 名	(株)ヴォーグ美容企画
代表者	橋爪 雅之
所在地	大阪府 大阪市都島区都島本通 1-7-2-201
設 立	1972 年 12 月 1 日
事業規模	美容室 7 店舗
従業員数	49 名

資産表

資本金	1000 万円
年 商	2 億 5,000 万円
粗利益率	88%
借入金	1 億円（コロナ融資含む）
不動産	事務所（分譲マンション） 自社ビル（店舗・研修所・寮）
株 式	8000 株（全て代表が所持）

現状の組織図

取締役会長：橋爪 尊子

代表取締役社長：橋爪 雅之

美容室 7 店舗

- HairMode KT 尼崎
- HairMode KT 塚本
- HairMode KT 京橋
- HairMode KT 池田
- HairMode KT 石橋
- HairMode KT Purl
- HairMode KT nico

Homepage
https://hmkt.co.jp/index.html

主な集客サイト
HOT PEPPER Beauty

先代の急逝から26年、親子の承継ドラマ。

今回取材させて頂いたのは、関西統括大阪本部の橋爪尊子さんと息子である雅之さんが経営する「**(株)ヴォーグ美容企画**」。創設者は尊子さんの亡き旦那様であり、SPC関西の立ち上げに尽力した関西統括本部第5代会長の橋爪賢二さんだ。脂の乗った48歳という若さで急逝された後、果たして会社はどうなったのか…親子の承継劇に迫る。

創業とSPC

尊子さんは独身時代、大阪で6店舗を展開する美容室に勤めており、店長を任さていた。今では多店舗化も珍しくはないが、半世紀前の当時にそこまでの規模のチェーンサロンは当然数少なく、そこで登り詰めたのだから、その実力は言うまでも無い。

賢二さんとご結婚されたのは24歳の時。それを機に退職し、翌年ご長女を出産。しかし美容師の仕事が大好きな彼女は、26歳の誕生日に5・5坪の小さな美容室を開業した。その後も長男の雅之さんを出産したが、開店前から行列のできる繁盛店になった為、人を使いながら仕事と育児を両立する日々を送った。

賢二さんは結婚当初、理容師として勤めに出ていたが、自分で理容室を独立開業した頃にSPCに出逢った。仲間たちと経営の勉強をしつつ、中川歴代や本田歴代と共にSPC関西の立ち上げにも尽力した。そして理容から美容へと経営を転換し、次々と出店して会社の規模を広げて行った。

賢二さんは「妻には育児と家庭を中心に生活してほしい」という考えで、法人化した後も尊子さんの美容室とは合併せず、仕事のことでは夫婦はお互いにノータッチだった。また賢二さんがSPCの会長職を2期連続で勤めた時には、会員さんがよく自宅に泊まりに来ていたそうだが、尊子さんは食事のお世話だけに徹し、会話に混ざることもほとんどなかったという。賢二さんはSPCのやり方で、尊子さんは自分の好きなように、2人はお互いを尊重し、仕事には口出ししない関係性を大切にしていたのである。

突然の別れ

月日は経ち、賢二さんは尼崎に自社ビルも建て、10店舗で社員数70名以上を抱える美容室オーナーとなった。長女の智子さんも美容の道に進み、現理事長の横田剛一氏の会社で修行を経て、自社に帰って来た。しかし一見、順風満帆とも取れる状況の中、事態は一変する。

Takako-Hashizume

尊子「あれは26年前の12月の事でした。いつもは全然料理などしない主人が、娘が疲れているだろうと珍しく夕食に水炊きを振る舞ってくれて。その夜、急に吐血して、そこから入院してわずか4日でこの世を去ったんです。昔からお酒が好きだったから、内臓がやられていたのかもしれませんが、出血が止まらずあっという間の出来事でした。翌日は中川歴代とゴルフに行くと言っていて、私がお断りの電話をしたのをよく覚えています。当時はまだ雅之も高校3年生だったんですが、今後は社会人としてしっかりやって行ってほしいという想いもあって、喪主を務めさせました。とにかく急な出来事だったので、何をどうして良いやら途方に暮れました」

賢二さんは当時48歳。あまりにもお若く、あまりにも急なお別れ。ご家族はどんなに悲しかっただろう。SPCでは誰にでも物事をはっきり言葉にする厳しい人だったそうだが、家庭では子煩悩で、とても優しいお父さんだったそうだ。どんなに食事会が多くても**「うちの飯が1番！」**と尊子さんにもいつも感謝を忘れなかった。

Kenji-Hashizume

仲間たちの助け

悲しみに暮れる中、現実は待ってはくれない。それまで会社にノータッチだった尊子さんは、10店舗にまで成長した賢二さんの会社をどうするべきか思い悩んだ。仲の良かった会員さんたちに引き取ってもらうこともできたが、主人がこれまで一生懸命に育てた会社だ。尊子さんは腹を括って、2代目社長を引き継ぐ覚悟を決めた。しかし経営などしたことのない自分が本当に会社を守れるのか、寒さと不安でガタガタと震えて眠れない夜が続いたそうだ。

尊子「主人が亡くなった翌月に、会社の全体会議がありました。私はそれまで1度も会議に出たことがなかったので、娘にどんな感じか聞きつつ狼狽えるばかりでした。しかしその会議に中川歴代が出席して下さり、社員たちに**『今こそしっかり団結して会社を守れ！』**と激励の言葉を頂きました。それが当時の自分にとって、どれだけありがたかったか…。そしてこのまま頼りっぱなしではダメだと思えた出来事でした」

それからは皆に勧められて4月にはSPCに入会し、たくさんの仲間たちに励まされ、支えられながら、経営の勉強が始まった。様々な情報を入手しては自社に持ち帰り、経営人生がスタートしたのである。

当時を振り返って尊子さんは**『あの時、私の戦いが始まった』**と語る。

失敗は成功のもと

引き継いだ当時の会社は、単価の安さが売りのお店だった。次の春には既に10人の入社が決まっていたが、尊子さんは高卒ではなく専門卒を取りたいと考えた。そこで雇用環境を整えるべく、社会保険にも加入し、その為に全店舗でメニューを一新し、単価を一斉に上げたそうだ。

経営者としては素人同然の自分が突然店のやり方を変える事について、絶対にうまく行かないだろうと**先代の育てた幹部からは猛反対**を受けた。しかし尊子さんは**「今までと同じことをしていたらダメになる」**という自分の直感を信じて押し通した。

結果、当然のごとく昔からの馴染みのお客様は離れていき、動員が減れば全体の売上も下がり、税理士からは「このままでは会社がなくなりますよ」と言われるまでになってしまった。しかし尊子さんは諦めず、店舗の立地を見直したり、店の数やスタッフの配置を整理したりと、とにかくこれからの時代に自社もスタッフも負けるまいと会社の立て直しに奮闘した。

尊子「今から思い直せば、まずは1店舗でテストしてみてから全店に導入するとか、もっとやり方はあったんでしょうけど…。**社員が誰も辞めずについてきてくれたことが唯一の救い**でした。修行先での経験を活かせた事も大きいとは思いますが、やはり主人がスタッフ一人一人に**思いやりを持ってきっちり育てていってくれた**からだと思います」

そんな大変な時期を支えてくれた社員さんの中には、九州統括の永田康室員もいる。2代目社長の怒涛の交代劇の後、会社がしっかり軌道に乗ってから地元に帰られたそうだ。

また、先代の育てた事務員さんにはかなり助けられたという。賢二さんが経営で苦労した時も一緒に乗り越えたパートナーだからこそ、スタッフ側にも会社側にも寄り添って意見してくれて、いつも下から支えてくれたそうだ。

「思いやり」、それが創業の精神。

後継者の育成

雅之さんは、幼少の頃から父に後継ぎとして育てられてきた。父が他統括の担当をしていた時には、大好きな鉄道につられて中国統括や九州統括などについていき、松原歴代のご子息の忍さんと一緒に遊んだり、各地の二世と交流していた。

父は『**一流のものに触れる事や人を喜ばせるサービスとは何かを感じられる事が大切だ**』と教育し、家族旅行では乗馬をしたり、食事の美味しいリゾート地に行くなど、子供心にも楽しい思い出ばかりを残してくれたそうだ。

父が亡くなった時には大学も推薦入学が決まっており、大学では早々に単位を取り終えて時間があったので、自社に役立つからと社労士の勉強に励んだ。将来について悩む事もあったが、決算報告のタイミングで税理士と母から帰京を打診され、入社を決意した。

雅之「やっぱり**摺り込み現象**というのか、そういうのはありましたね。親父が亡くなった時は、自分がこの会社をもっとデカくしてやる!とは思わなかったんですけど、**やっぱり守らないと!**って気持ちが大きかったですね」

一足先に美容業界に入って自社を支えていたご長女の智子さんには後継者としての話は出なかったのだろうか?

尊子「智子には自社の店長をやらせてみた事もあったけれど、やっぱり女の子だからね。結婚して子供も3人授かって、今では子育てしながら週に1度介護施設にカットしに行ってますよ」

雅之「母も昔気質なところがありますから、主人の言いつけを守って私に譲ったというところではないでしょうか」

父としては「自分の後継者は息子に」と、かなり前から準備をされていた事が窺える。雅之さんも、自分が継ぐことを視野に母を支え続け、時にはアドバイスもしながらここまでやってきた。

雅之「母から自分に承継した時は、全体に発表するまで誰にもその話を漏らしませんでした。SPCでも新会長の選挙が終わると、交代前なのに**何となく空気が緩む**気がしていたので、自社でもそういう事があったら良くないと思いまして…。ズバッと世代交代して、社内では特に違和感もなく出来ているので良かったです」

SPCでの学び

雅之さんも10年程前にSPCに入会し、あらゆる情報を仕入れては自社に持ち帰るものの、なかなか成果が得られない時に高橋歴代にかけられた言葉が**自分を変えるきっかけ**になったという。

雅之「本当に突然、食事の席に呼ばれて。多分、私の顔に出てたんでしょうね…会社がうまく行ってないって。そしたら高橋歴代が『**お前が上手くいってないのは、お前が型をわかっていないからだ**』っておっしゃられたんです。『空手も柔道も基本の型があるだろう。**型もわからないのに応用なんてするな!**』って。

その言葉が自分の中に不思議とスッと入ってきたんですけど、最初は『型』っていうのがさっぱり分からなくて、SPCの会員さんで会う人会う人に『社長として気をつけている事ってなんですか?』って質問をし続けたんです。もちろん答えは様々で、社員との距離感とかトイレを綺麗にするとか、具体的な事なんですけど。その**具体を通して、その人の考え方や在り方ってものが見えてくるようになって**、それで自分と比べたり自問自答したりしてるうちに、『**型**』って**在り方なんじゃないかな**?って思うようになって。

高橋歴代はきっと『**経営者としてのスタンスや在り方も確立してないくせに、やり方ばっかり学んでんじゃねぇよ**』って事をおっしゃられてたんじゃないか?って。それが自分の在り方と向き合ったり、SPCでの本来の学び方に気付かせて頂いたきっかけでした」

亡き父に変わって、SPCの仲間たちがしっかりと**温もりのある叱咤激励**をかけ続けてくれている。こうした土壌を残してくれた父の偉大さには、まさに「感謝」の一言に尽きるだろう。

三代目の創る未来

母や亡き父から引き継いだ大切なものとは?という問いに、雅之さんは一言で言えば「**思いやり**」と答えた。両親は二人とも、スタッフに対して良い時だけではなく大変な時でも**根気強く寄り添い**、できる人もできない人も**競争をさせず、共存できる**ようにしてきたという。そういった思いやりのある**職場環境**と社員たちへの**安心感**を守り続けたいと語った。

実際にヴォーグ美容企画の社員さんたちは、長く勤めている方がとても多く、幹部たちのほとんどが家を建てて家庭を築いているそうだ。

雅之「私が感じている今後の課題は、美容業界全般に言える事ですが、社員たちの**生涯雇用**についてです。客観的に見て、特に男性美容師は『雇われてるのは40歳くらいまでで、出店して50歳くらいまでに現場を抜けられるか?』みたいな暗黙のルールのようなものを感じています。**ある程度の年齢になった人材を使い捨てる風潮**がなくならない限り、業界が良くなるわけがない!このままでは美容師という職業のなり手がなくなる!

だから自分は、スタッフが**定年退職できるまでの居場所**を作れるようにしたいと思っています。店長よりその先の未来を、会社と共に頑張って創って行こうよ!っていうスタンスで」

これまで父と母が温めてきた会社やスタッフたちを、時代に合わせてどう生き残っていくのか、雅之さんは自分の目標や使命を見定めていた。

尊子さんは会長として、今後についてどのようなお考えをお持ちなのだろうか。

尊子「実務的な事で言えば、新人研修はずっと受け持ちたいと考えています。私はずっとSPCで**資質表現教育**をやってきて、インストラクターでもあります。資質表現では自己表現の勉強の一環として、本気の劇を演じたりするのですが、自社の新人研修でも毎年取り入れているので、そういった指導は今後も担当していけたらと考えています。

あとは、世代交代をしたら完全に任せて、もうタッチしないというスタンスの方も多いとは思いますが、私はちょっと違うかな…と感じています。今後も助けられるところは助けたいし、支えられるところは支えてあげたい。スタッフも息子にも『**負けない人生**』を生きて欲しい!」

父の急逝から、今年で26年。ここまで阿吽の呼吸で支え合った親子だからこそ、承継後もお互いの役割分担をしっかりと明確にして今後も伸び伸びと未来を創っていくのだろう。

何のドラマもない人など居ないが、要所要所で絡み合う人と人との繋がりが未来を創っている…そう感じさらられた取材であった。

Masayuki-Hashizume